

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025 年 4 月 30 日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏 名	津村 風帆

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域) 神戸港～函館港	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験) 海生哺乳類調査実習	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで) 2025 年 4 月 20 日 ～ 2025 年 4 月 24 日 (5 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏) 北海道大学水産学部附属練習船おしよろ丸, 三谷曜子教授	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由) 写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
【実習概要】 今回は、日本の太平洋沿岸域に生息する海生哺乳類の目視調査実習を行った。実習を通して、海洋域における目視調査技能やデータ整理に関する知識、船上生活の心得等を習得することを目的とした。	
【スケジュール】 4/20 乗船・航行中の注意事項等の確認・目視調査①16:00-17:00 4/21 目視調査②6:30-17:00 4/22 CTD (Conductivity, Temperature, Depth) 調査 5:30-10:30 目視調査③11:00-17:00 4/23 目視調査④6:00-17:00 4/24 目視調査⑤6:00-7:00・掃除・下船	
 おしよろ丸外観	 目視調査の様子
【調査方法】 指導教官の三谷先生もしくはTAの鈴木さんどちらか1名と実習生2名の計3名が同時に目視調査を行う。それぞれが、前方180度を肉眼と双眼鏡を用いて注視しつつ、海生哺乳類に限定して探索し、発見した場合は位置と時間、種名、頭数、発見の手がかり(ひれやブロー等)、発見者などの情報を記録する。この際、可能であればカメラやビデオでその姿を撮影する。また、30分毎に天候・海況等を記録する。	

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

【調査報告】

1 日目：大阪湾付近

波は穏やかで、視界等も不良という訳ではなかったが、残念ながら発見にはいたらなかった。

2 日目：伊豆諸島付近

この日は海況が悪く、波が高い時間が続いたが、午後にハンドウイルカの群れを2回（1回目15～20頭、2回目5～10頭）発見することができた。ハンドウイルカは船の下側を通過するように移動しており、三谷先生によると船の水流に乗って遊び行動をしている可能性もあるとのことであった。



発見したハンドウイルカ

3 日目：千葉県沖

天候も比較的良好で、前日より波が低かったが、発見は遠方に大型鯨類（種不明）のブローを確認したのみであった。

4 日目：東北地方太平洋側

朝から降雨にみまわれ、ブリッジからの観察となったが、早朝に大型鯨類（ザトウクジラと推定）のブローと尾びれを確認した。

5 日目：函館沿岸域

波は低く、天候・視界ともに良好であったが、海生哺乳類の発見には至らなかった。

【総括】

実習参加前から多少の予想はしていたものの、やはり調査中のほとんどの時間は何も発見できないままに過ぎることとなった。船酔いも相まって、調査に困難を感じることもあったが、「発見できないことも一つの重要なデータ」と指導をいただいたため、最後まで手を抜かず目視調査を行うことができたように思える。

一度ハンドウイルカが発見された際にカメラでの撮影を試みたが、海洋上に姿が見えてからシャッターを押しても間に合わず、調査に有効な画像を残すことができなかった。遊泳中の海生哺乳類と海上で遭遇することは一瞬の出来事であり、撮影機器の理解や撮影技術の向上もまた調査に有益であることが実感できた。

今回、野生の鯨類と遭遇したことは私個人にとって初めての経験であったが、座学や映像媒体では味わえない、筆舌に尽くしがたい感動を得ることができた。現在、国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）にも示される通り、海洋においても陸上においても生態系の保全が重要であることは世界的な共通認識である。生態系の保全の達成のためには、市井の人々の意識改善が鍵となるが、今回の実習で私が経験したような野外における野生動物との出会いは、人々の保全意識の醸成に貢献するものではないかと思えた。この点に関して、学校教育の学習課程に野外実習を積極的に取り入れることも非常に重要であろう。以上の所感を得られたことは、「保全教育」をテーマとする私自身の研究に非常に有益であり、今回の実習の大きな成果の一つとなるだろう。

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

本実習に参加するにあたり、PWS の皆様には多大なるご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。また、函館までの航海を安全に導いてくださったおしよる丸の船員の皆様、そしてご指導いただいた三谷先生、TA の鈴木さんにも、この場をお借りして深く御礼申し上げます。